

## 永井博先生を悼む 永井博先生の思い出

著者	寺中 平治
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	11-12
発行年	2014-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00122561">http://hdl.handle.net/2241/00122561</a>

# 永井博先生の思い出

寺中 平治

永井先生の教えを直接受けるようになったのは、昭和 37 年に東京教育大学大学院の修士課程に入ってからである。それまでも、先生の『近代科学哲学の形成』を読み敬服していたので、講義に出席したり、またいろいろとご指導いただけるようになったのは、望外の幸せであった。修士論文の作成については、先生のお宅まで伺い、いろいろと直にご指導をいただいた。その後も何かの機会には先生のお宅に伺ったことがあるが、奥様と一緒に暖かく迎え入れていただき、私も教師になればこのような学生に接すべきだということを学んだ。

大学院に入ることは、将来学者・研究者を目指すことを意味するが、恥ずかしいことに、研究するとはどういうことかについては十分にわかっていなかった。先生のお導きにより、学会に入り、そこで研究発表をし、さらには学术论文を書くことを教わった。学会としては、日本哲学会への入会は当然としても、私の科学哲学という専門からして科学基礎論学会に入会した。科学基礎論学会は日本を代表する科学哲学の学会であり、昭和 29 年に創立された。哲学のみならず、物理学、数学、心理学等を専門とする科学者も会員となっており、その中には日本ではじめてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士の名もみられる。大会で名前しか知らなかった各分野の著名な学者のお姿を拝見し、一種の感慨を覚えたことが記憶に残っている。東京教育大学からは、永井先生が師事され、また東京文理科大学および東京教育大を通して同僚であられた下村寅太郎先生が同学会の創立者の一人として参加されており、下村先生、永井先生は学会運営に中心的な役割を果たされていた。その関係もあり、私もその後学会を少しお手伝いさせていただくことになった。雑誌の編集とか大会の開催・運営のお手伝いをする中で、多くのことを学び、その後も役に立った。はじめての学会発表も、永井先生に勧められたこの学会の大会であった。緊張し、また発表時間が途中で足りなくなりあわてた覚えがある。

いわゆる学术论文をはじめて発表したのも、この学会の機関誌である『科学基礎論研究』である。しかし公に印刷されたものとしては、その前に出版社の創文社の PR

誌である『創文』に、「田辺元」について2ページほど書いたものがある。もちろんこれも永井先生のお勧めによるものである。短いものであるが、田辺元について書くということで、大変であった。途中まで書いたが、あまりうまくまとまりそうもなく、「書けそうもありません」と申し上げたら、いや頑張って書いてみなさいといわれ、どうやら書き上げた覚えがある。何か困難なときに、諦めたらそれで終わりである。諦めないで最後まで努力をすることの必要性をこのとき学んだ。PR 誌への掲載であるが、はじめて公に印刷されたものであり、いまでも記憶に残っている。永井先生は、短いがこれも一応公に印刷されたものであり、一種の業績と考えていいよと暖かく言われたことを、ありがたく覚えている。

私は大学院の博士課程の途中で哲学科の助手に採用され、より身近に永井先生に接するようになった。いつかの入試の時に、永井先生は入試委員長になられ、その集まりに出席した。事務職員を含め、大勢の入試関係者を前に、入試に関する運営事項をてきぱきとまとめ、また指導され、先生の新しい面を見た感じがした。しかし先生が東京教育大学に在任中に起きた大変な出来事は、いうまでもなく東京教育大の筑波への移転構想をめぐって起きた筑波紛争である。移転については、文学部の教官の中でも意見の対立があり、昭和43年には一部の過激な学生による大学の建物の占拠や昭和44年度入学試験の中止ということがあった。先生がこのときいろいろと苦勞されていたお姿がいまでも目に浮かぶ。その後永井先生は筑波大学に移られたが、私は筑波移転が始まる前に他大学に移ったので、筑波大学でのご活躍の様子については、具体的には存じ上げない。しかしいろいろな学会でお目にかかって、先生のご活躍を目にしたり、また親しくお話をさせていただいたりした。

先生は、筑波大学退官後、学士院会員に選ばれ、われわれは皆誇りに思ったものである。

そのうち一度お伺いしたいと思いながら、それを実行しなかったことが悔やまれてならない。しかし先生の教え、お導きは、文字通り学恩としていまでも私の心の中に生きている。

(てらなか・へいじ 聖心女子大学名誉教授)